『言語文化研究紀要』*SCRIPSIMUS* No.29, 2021

分岐点

ホセ・マリア・メリーノ著
鈴木正士訳

その招待状は、郵便受けにいつも入っているチラシや、銀行からのダイレクトメールのなかから、唐突に現れた。発起人カルロス・カンポイと署名されたその便りは、大学卒業 25 周年記念ディナーパーティーの誘いの知らせだった。思い出を分かち合おうという趣意書に並んだ美辞麗句に、昔の彼なら辟易したかもしれない。しかし、この年頃になって読んでみると、思わず彼は涙ぐみそうになった。カルロス・カンポイという発起人の男を思い出したときにも感動をおぼえた。赤ら顔で卑屈な小太りのその男を彼は学生時代嫌っていた。だが、大学生活が色彩をもった楽しいとさえ感じる思い出としてよみがえったとき、たちまちかつての嫌悪感はやわらぎ、消えてなくなった。

発起人のカルロス・カンポイは美文調で次のように述べている。「ああ、ある者は、学びの窓から遥か彼方へと誘(いざな)う人生の道半ばで路傍に倒れた。しかしながら、いまだ途上にある我々は、写真の中に再会を印(しる)そうではないか」。このように書いて、カルロス・カンポイは２度目の卒業写真を撮ろうと呼びかけていた。制作にかかる経費は、広告収入一切無しで、自分の会社が引き受ける。卒業時に記念撮影をおこなった写真店フォト・ベリンゴラに各自行って、写真を撮ってくれ、と言っていた。今回は最新技術によるテクニカルカラー写真だ。

感激して彼は小さく声をあげたが、家族の姿が目に入って、あわてて口をつぐんだ。誰も彼の話に耳を傾けてくれそうになかった。妻はテレビドラマに夢中だったし、双子の息子はテレビゲームにかじりついてジャングルに跋扈(ばっこ)するミュータントやモンスター相手に我を忘れている。娘は雑誌をめくりながらお気に入りのＣＤをヘッドホンで聞いている。

25 年たったのか。大学時代のひとつひとつの出来事を思い出しながら、彼は好奇心に駆られてリビングルームから書斎に行き、同窓生の顔がならんでいる卒業写真を探した。卒業写真をフレームに入れて飾ったことは一度もない。

机の引き出しにいろいろな書類や少年時代のがらくたと一緒におさまっていた。筒状に巻かれた卒業写真を覆っている羊皮紙をはがすのはひと苦労だったが、なんとか広げると、忘れていたなつかしい友人たちに彼は再会することができた。上部には大学の校章、下部には《律法の石碑》と《正義の天秤》の図柄、そのあいだを渦巻き模様とアラベスク模様が囲んだ上質の厚紙の中央に彼らの顔があった。

教員たちの顔の下、楕円形の枠のなかに同窓生はそれぞれおさまっていた。法服(トーガ)を模した布を身につけV字型の懸章を肩にかけて、みんな放心したような、呆然としたような、怯えたような顔をしている。まるで穏やかな表情をすることが禁じられているかのようだ。彼は自分がどこにいるかさがした。２列目の一番端にいた。カルロス・カンポイの近くだ。この男はねずみのような目をして、口もとに子供っぽさを残している。すぐ上には、《歓喜詩人》というあだ名がつけられた、ひどく退屈な教師だったエルミータス先生がいた。

同窓生ひとりひとりの顔を彼は眺めていった。イレーネの顔に目がとまった。その瞬間、砂漠のなかの乾ききった河床が岸まで水で満たされていく光景が脳裏に浮かんだ。乳のような白い肌、黒い瞳、ふくよかな鼻、肉感的な唇。彼女の思い出が勢いよく湧き上がって、彼の心にいっせいに押し寄せる。

大学入学当初から彼はイレーネに強く引かれていた。ほかの女の子には感じなかった激しい欲望を彼女に抱いた。この欲望をもとにほかの女の子への欲望の強さや質をはかったほどだ。大学時代、彼は彼女をひたすら思いつづけた。彼女は夢のなかにまで現れる彼の片思いのひとだった。ほかの女の子とステディーな間柄になったときでさえ、実はひそかに激しく彼女を求めていた。学年が上がるにつれ、ふたりは親しくなっていった。しかし彼女を自分のものにできるとは思っていなかった。最初から、彼女は彼と一定の距離を置くよう巧みにふるまっていたし、セラーノ通りに暮らす金持ちの青年三人組にいつも囲まれており、彼らに対して、関係をもってもいいというサインを大胆に見せびらかせていたからだ。彼女のその振る舞いは、男性からのアプローチを拒みつづけるほかの女の子たちとは対照的な態度だった。

卒業写真のなかにイレーネの顔をみつけると、彼はもうほかの同窓生を見よ

うとはしなかった。思春期から完全には抜け切れていなかったあの時代に抱いた思いに似た、まとまりのつかない感情を、彼はどうしてよいかわからなくなった。そこで卒業写真を引き出しの奥にしまった。中年男には似合わない追憶はやめにして、気持ちを切り替えなければならない。

ところが、リビングルームに戻り、ドアのところであらためて家族を眺めたとき、彼は違和感をおぼえた。その場にいてもなにかしっくりこない。疎外感といってもいい。学生時代昼も夜も思いつづけながら告白できず彼の心に後悔の念を残しているイレーネの方が、テレビの前にいる妻よりも、今の彼にはずっと身近な存在だった。妻とはなんら新味もなく決まりきった手順で事を進めるだけの夫婦生活がつづいていた。反復される一連の儀式のあとには空疎な喜びと白けた余韻しかなかった。

彼はドアのところにたたずんだまま、奇妙な感覚から逃れられずにいた。妻や子供たちはすぐそこにいるように見えるだけで、実は彼らもイレーネのように、薄らいでいく彼の記憶から引き出された表象ではないのか。そして自分も、消えずに残ろうとあがいている迷走する思考でしかないのかもしれない。ぼんやりと彼は思った。

結局彼は、リビングルームには入らず書斎に戻ると、招待状に記されている発起人カルロス・カンポイの電話番号に電話をかけた。相手は不在だったが、メッセージを残してくれるよう、留守番電話に録音された声が答えた。昔と変わらない甘ったるいその声を聞くと、カルロス・カンポイに対して彼はまた嫌悪感をもよおしたが、ともかく自分の名を名乗ると、大学卒業25周年記念ディナーパーティーに出席することと写真を撮りに行くことを告げて、電話を切った。それから彼は、リビングルームに戻り、家族のいるソファに座ったが、こっそりいたずらをして喜ぶ子供のように、大学卒業25周年記念ディナーパーティーのことは家族のものには黙っておこうと心に決めた。

数日後の夕方、つとめている弁護士事務所にクライアントが途絶えたのを見はからって、彼は写真店に出かけた。道路はどこも車がいっぱいだったので、駐車場に車を入れなければならなかった。駐車場から出ると彼はのんびりと歩

いた。家の灯りや街灯、ショーウインドーや看板の電飾がたそがれの薄明かりのなか、さまざまな色合いでくっきりと瞬きはじめていた。人どおりのまばらな坂道をぶらつくにはお誂(あつら)え向きのシチュエーションだ。

写真店の壁はいたるところペンキが剥げ落ちていたが、大きな窓の下に掲げられた二つの看板には灯りがついていた。今の時刻、あたりを走る車はない。すぐそばのサン・ベルナルド通りの賑わいにくらべると、この通りの静けさはきわだっていた。隣接する二つの地区を深い河が仕切っているかのようだ。写真店の入り口で若い娘が力まかせに店のシャッターを下ろしていた。今日はもうおしまいか、と彼は尋ねた。

「閉店しました。開店は、午前は９時、午後は５時です」と娘は答えると、鎖のついた大きな錠をかけ、サン・ベルナルド通りの方へ行ってしまった。

出端(でばな)を挫(くじ)かれた彼は、店の前で、今来た道の方をぼんやり眺めた。ここに来るのは大学卒業以来だ。大学町のアルグエリェス地区とともに、この地区も当時、安酒場や安食堂でにぎわっていた。安いメニューしか注文しないで長いこと粘っても大目に見てくれる居酒屋やバルがそこかしこにあった。

これからどうしたものかと考えあぐねているあいだに、太陽は西へと傾き、秋の日は瞬く間に暮れた。かすかにともった街灯の光のなか建物の軒や出窓の枠が、途切れた描線のようにぼんやりと浮かんでいる。左右対称に並ぶ穴のように見えるバルコニーは、なんの変哲もなく画一的だったが、だからこそかえって彼の目に美しく映った。それぞれの家のバルコニーにある積み上げられた家庭用品やガスボンベ、下に置かれたプランターや上から吊るされた植木鉢も、闇にまぎれてその姿を識別することができなかった。

あの頃、イレーネはこの地区に暮らしていた。ここからすぐ近くだ。急に彼は彼女の住んでいた家に行ってみたくなった。当時彼女に会いたくて、人目を気にしながら偶然をよそおい、そのあたりをうろついたものだった。彼女に会うことは一度もなかったが。そんなことを思い出すと、彼は急に気恥ずかしくなった。顔がほてるのを感じながら、どこへともなく歩きだした。ゆっくりと坂道をのぼり、暗い通りを突っ切ると、小さな広場に出た。町のなかにぽっかり空いたその空間はうっすらともった街灯の光を浴びて、霧のかかった湖水に

みえた。

振り向くと、今のぼってきた坂道の下にマドリッドタワーが望めた。それはまるで光を放つ文字が刻まれた巨大な碑(いしぶみ)のようだった。広場に目を戻すと、エル・エスピリトゥの看板に彼は気がついた。その居酒屋から、昔と変わらない様子でくつろいでいる地元の人々のざわめきが漏れてきた。

店のドアを開けたとたん、煙草とアルコールの臭いの混ざった強烈な臭気が彼の鼻をついた。その臭いはイレーネとのあいだに横たわっていた歳月を消してしまったような気がした。あばら家のようなその居酒屋に、彼は当時よくビールを飲みにきたものだった。彼女の家のまわりをうろついたあと、クアトロ・カミーノスの先にある自宅に帰るまでの短い時間だ。腹が減って、眠くって、わびしくって、やりきれなかった。

今だったら、すべてが違っていただろう。一気にグラスを空にすると、彼は思った。今だったら、車に乗って彼女に誘いをかける金持ちで高慢なあの三人組の連中に気おくれすることはない。笑いものになっても気にしないで、彼女を追いかけまわすだろう。

店を出ると、彼はヘスス・デル・バーリェ通りを下っていった。エル・エスコリアル通りと交わる角にあった居酒屋が今もまだあるか確かめたかったのだ。闘牛のポスターが貼られオリーブの樽が並んだその店は、マノロというセビーリャ出身の男が営んでいた。思いがけなく、当のマノロは今も元気で営業をつづけていた。短くなった葉巻を歯にはさんで、小刻みに手は震えているものの慣れた手つきでワインを注いだり、丁寧にデカンターをカウンターに並べたりしている。学生時代この地区に入り込んでイレーネの家をうろついた帰り、ここにもよく彼は飲みに来た。

マノロの店のすぐ下に、一日じゅうポテトやパンの耳を揚げている、油でべとついた煤(すす)でまっ黒な揚げ物屋が昔と変わらずあった。そして揚げ物屋の前には、ステンレスでできた腰の高いカウンターのバルがあった。当時、そのバルの流しには食器をすすぐ水桶が置かれ、蛇口から流れ落ちる水のなかで小さな金魚が一匹泳いでいたが、金魚を除いてすべてがあの頃のままだった。25年以上も前、彼の意気地(いくじ)の無さを冷ややかに眺めていたものたちが今もここにあ

ることを、彼は少なからず喜んでいた。店から出ようとしたとき、ドアのガラスに彼の顔が映った。つかの間そこに、無精ひげを生やした20歳の彼が見えたように彼には思えた。

結局彼はイレーネの家まで来てしまった。彼女の家は装飾がほどこされたバルコニーのあるレンガ造りのアパートだった。アパートの正面は道の角に面していたため、ファサードは小さく裏門のようで、見る者に奇妙な印象を与えた。彼は3階のバルコニーを見上げた。物陰に隠れて何度も眺めたバルコニーだ。こんなにもはっきりと若い頃の苦い体験を思い出せることに彼は驚いていた。

イレーネ。彼はふたたび思った。今だったら、すべてが違っていただろう。

まるで青春時代を後悔する彼の心のつぶやきにこたえるかのように、その時、一番端のバルコニーの奥で黄色い灯りがともった。カーテン越しに若い女の影が見えた。それは昔よく見上げたガラス窓に映る忘れられないひとのシルエットに似ていた。

とうの昔彼と約束して果たさなかったデートの準備を女はしているのだろうと彼は思った。しばらくそこで女を待っていた。部屋の灯りは消え、女の影は闇に溶けた。しかし彼にはわかっていた。女は違った形でまた姿を現すだろう。ずっと前に忘れてしまった、今の季節にはない匂いがあたりに漂っていたからだ。秋の夜にうららかな春の宵が闖入(ちんにゅう)してきたようだ。生あたたかな夜風に若葉や草花の匂いが運ばれてくる。卒業試験の日々、彼を不安定な気持ちにさせた匂いだ。その匂いはあるものを彼になつかしく感じさせた。それが何なのか、どうしても思い出せない。

その時、アパートのファサードの門が開き、女が出てきた。そして立ち止まると、ためらいがちに左右を見た。彼は女に近づこうと、狭い道を向こう側にわたった。

女はイレーネだった。イレーネの表情にはみずみずしい若さが今も消えずにあった。歳月は彼女にはいたって寛大だったのだ。それに引きかえ、おれの髪は白くなり、老眼は進み、若い頃にはなかった贅肉が身体のあちこちについている。髪をショールで巻いた彼女は、近づいてくる彼をじっと見ていた。

「イレーネだよね」彼は興奮して思わず大きな声で言った。長いあいだ縛られていた重い鎖から彼の心は解き放たれた。

イレーネはしばらく彼を見ていた。なにも言わなかった。その沈黙は彼女の神秘的ともいえる登場のしかたによく似合っていた。

しかしイレーネはゆっくりとほほえむと、ひと言「ガブリエル」と言った。彼はイレーネに飛びつくと、なめらかな彼女の冷たい頬に何度も口づけをした。その時、イレーネの身体からそよ風が運んでくる早春の匂いがした。

「この 25 年間何をしていたの？　どこにいたの？」と彼は尋ねた。

イレーネはゆっくりと彼のひげを撫でるだけで、彼の質問には答えなかったが、「白いものが混じっている」とつぶやいた。その言葉に、思いがけず彼は胸の高鳴りを感じる。

「元気だった？　今まで何をしていたの？　奨学金をもらって外国に勉強に行ったって聞いたけど」と言うと、「わたしのことなにも知らなかったのね」と、咎(とが)めるような口調で彼女は答える。

彼は黙った。知らなかったのは、きみのことだけではないんだ。イレーネがいなくなったあと、大学を卒業した彼は、仲間たちに誘われて、一度夕飯を食べにいったことがあった。しかし彼は、卒業したらつき合いも終わりだと思っていた。たいていの仲間たちにしたって同じ気持ちだったはずだ。彼にとって彼らは、人生の一時期ちょっとすれ違っただけの通行人だった。赤ら顔のカルロス・カンポイは定期的に飲み会を企画したが、出席したことはなかった。彼が地方で働くようになって、とうとう大学の仲間とのつきあいは途絶えた。だから彼らがイレーネと連絡をとっていたとしても、彼が彼女の消息を知る機会はなかったのだ。地方から戻った数年後、彼は今の妻と結婚した。家庭をもったことは彼の人生に大きな変化をもたらした。大学時代の出来事は、少年時代の出来事と一緒に、思い出のキャビネットのなかにしまいこんだ。それを開けるのは、ひとり思い出に浸りたいときだけだった。そんな時彼の脳裏に浮かぶエピソードはどれも甘美なものばかりで、よく躾けられたペットのように彼の心に従順だった。しかし、過去というものは、野生の獣の表情を隠し持っていて、いつひとに襲いかかるかわからないのだ。

「あいつらとは連絡をとっていなかった」と沈黙のあと、やっと彼は言った。「地方でしばらく働いていたんだ」

「だからわたしのことなにも知らないのね」と、からかうようにあきらめ口調で彼女は言う。「それで、あなたは？　あなたはどうしていたの？」

「言ったとおりさ。ぼくは地方にある叔父の弁護士事務所で働いた。それから結婚した。子供は三人いる。双子の息子と娘だ」

こう言ったとき、毎夜リビングルームで繰り広げられる家族団欒の光景が目に浮かんだ。テレビの前に集まって、妻や子供たちはみんなそれぞれ好き勝手なことをしている。テレビを見たり、テレビゲームに耽(ふけ)ったり、ヘッドホンを耳にあてＣＤを聴いたりする。その時、急に彼は不安に襲われた。浮かんだとたん消えていく疑問がまた彼の心に湧き上がってきたのだ。家族の光景は彼が実際に体験しているものではなく、これまで何回も映画やテレビドラマで見て彼の意識下に残っている実態のない幻影ではないだろうか？

「奥さん、何ていう名前？」と、イレーネが訊く。

彼は戸惑い、とっさに妻の名前を思い出すことができず、一瞬口ごもるが、すぐに「ピラール。ピラールっていうんだ」と答える。

どうして名前が出てこなかったのだろう？　気にかかった彼は、妻のことを正確に思い出そうとした。あせらずにゆっくりと。妻の顔を思い浮かべると、それは映画やテレビドラマでよく見かけるどこにでもある顔だということに気がついた。たいした意図もなく回想シーンに意味ありげにソフトフォーカスされて登場する顔だ。その時、輪郭がぼんやりとした妻の顔の上に、レンの顔が鮮明に映った。

「ああ、それからレンという名前の犬を一匹飼っている」と彼は言った。飼い犬を思い出せたことで、妻の名前を忘れたことは帳消しになった、と彼は思った。

突然イレーネが彼の腕をとった。身体に触れられて、彼はやっと現実に立ち返ったような気がした。彼女は彼を誘う。二人は坂をのぼっていく。彼女の身体に意識が集中して、彼はしばらくなにも言えない。あと少しで坂の上だ。何度か人影が彼らの前を横切る。

「最近このあたりは物騒らしい」と彼は言う。「危険な場所もあるそうだ」
「ここはテソーロ通り」と、彼の言うことなど無視して彼女は言う。「テソーロ。宝物よ。なぜそう言うか、知っている？」
そう訊きながら彼女は彼に身体を密着させた。親密でなければできない行為だ。青春時代彼とのあいだに置いていた距離を彼女は一気に縮めたがっているかのようだ。
「昔々、宮殿を建てようとしたとき、土の下から金貨の詰まった陶器の壺が出てきたの。ねえ、想像して。隠された財宝の上を、今わたしたち気づかずに歩いているのよ」
そして声を落とすと、つぶやくように、こう言う。
「ねえあなた、すべて話してほしいの。包み隠さず、何もかもすべてを」
「すべてって？」と彼は問い返す。まるで、納得してもらえるアリバイをでっちあげようと時間をかせぐ容疑者のように。
「あの時代のこと、すべて」とイレーネは言う。
青春時代、内気ゆえに言えなかったことを言ってしまおうと、彼は決心する。彼の意気地の無さは、宿命の天敵のように二人のあいだに立ちはだかる壁だった。
「あの頃、心引かれたのはきみだけだ。ほかに思ったひとはいなかった。きみに夢中だった。ねえ、イレーネ。中学の社会科の授業で習った原器をおぼえているかい？　パリの博物館にあるらしい。度量衡の基準となった器物だ。ぼくがきみに抱いた情熱は、あらゆる情熱の原器となった。いろんな女性を愛したけれど、あんなに激しくひとを求めたことはなかった」
おだやかな微笑みを絶やさずに彼女は彼をじっと見ている。もっと話してと促しているかのようだ。彼は預言者が感じるような神経の高ぶりをおぼえる。自分の口から発せられる言葉はそのまま二人の運命を決定し、行動や状況を規定するのだ。
「でも、そんなときみには言わなかった。三人の金持ち連中がきみのそばから離れなかったからだ。でもやつらもきみに触れることはできなかったと思う。やつらにとってきみは、見せびらかしたいだけの自慢の宝だった。やつら

はぼくらほかの男をこの世に存在しないもののようにあつかった。やつらはきみの前に立ちはだかる壁だった」

彼は話しつづける。彼女に告白できなかったのは彼の内気のためだったにもかかわらず、イレーネの取り巻き連中のせいにして彼らの悪口を言う。彼の意に反して、話すほどに、若い頃のいらだちはよみがえり、彼が彼女に強く引かれていたことが知れた。彼は彼女に告白する。どうやって大学の教室できみが一番よく見える席をぼくは確保したか。どんなふうにきみの首や肩や足を眺めていたか。どうしてもぼくの頭からきみの太ももや腹やへそのイメージが離れなかったか。どんなにきみのわきのぬくもりや乳首の反応や舌の感触やヴァギナや恥毛の震えを想像したことか。

「さっききみの髪の匂いをかいだ。思っていたとおりの匂いだった」

二人はゆっくりと歩いていく。わずかにともっている街灯やショーウインドーが暗闇にぼんやりと浮かんでいる。イレーネは、調査中の研究を完成させようと情熱を燃やす教授のように、彼からもっといろいろ聞き出そうとする。彼は、卒業がかかっている試験に臨む学生のように、ひとつひとつの質問に真剣に答える。

しかし、やがて彼は立場を変えようと試みる。

「きみはなにも言わないつもりかい？　きみはどうしていたの？　今何をしているの？　あの頃きみは誰が好きだったの？　ぼくのことはどう思っていたの？　なんとも思っていなかったの？　どうしてあの三人の金持ち連中とつき合わなかったの？」

イレーネは笑いだす。

「もうずっと前からわたしはここには住んでいない。今日はちょっと通りかかっただけ」と言う。「ともかく、あなたはもっと思い出さなければならないわ。なにもかも忘れてしまったようだもの」

イレーネは気ままに歩いているように見えたが、行く先を決めていた。二人が再会した場所に戻っていた。そろそろ別れの時か、と彼は思う。そこで「夕飯にでも行かないかい」と彼女を誘う。すると彼女は、彼に腕をからませたまま身体をさらに密着させ、こう言う。

「ここがわたしの家よ。ここでのことも覚えていないの？」

イレーネのその問いかけは、彼の心の底に隠れている古い記憶を呼び覚まそうとする。しかし彼はかつて、彼女の家に入るほど彼女と親しい関係を結んではいなかった。車に乗って彼女を誘いに来たあの三人の連中ならこのアパートに入ったこともあるかもしれない。彼はただ彼女とカフェに行ったり、試験前ノートを見せ合ったり哲学の庭を歩いたりはしたが、友達の関係を超えることはなかった。

「さあ、上がって」とイレーネは言う。

曇りガラスの電球の光に照らされて階段をのぼり、彼女の部屋の前に来た。ドアには人目を引くデザインの格子がついた大きなのぞき穴があった。イレーネはドアの上のすき間に隠してある鍵を取るとドアを開け、二人は部屋に入る。階段の踊り場から射す弱い光をたよりに、イレーネはなにか棚のような黒い影のかたまりに近づき、その上に置かれた三本枝の燭台に火をつけると、ドアを閉めて、と彼に言う。ろうそくの炎がゆらめく家のなかには人の気配はしない。家具にはどれも白い大きな布がかけられていた。長いこと閉めきっていたせいで、干からびて粉々に砕け堆積している時間の臭いがした。

「誰もいないの？」と彼は彼女に訊く。その言葉は澱(よど)んだ空気に緊張感を与える。砕けた時間がひとつにつなぎ合わされ動きだしたかのようだ。

イレーネはなにも答えず、燭台をかかげて歩きだす。彼は彼女のあとをついていく。長い廊下の奥にある部屋の前に立ち、彼女がドアを開けたとき、なかにあった洋服ダンスの姿見の鏡に燭台の炎がきらめいた。

部屋には大きなベッドがあった。ベッドの四隅には装飾がほどこされた長いねじり柱が立っていた。イレーネはチェストの上に燭台を置くと、服を脱ぎはじめる。裸になった彼女の身体は若い娘のようで、肌には張りがあり、少しも衰えを感じさせない。上りつめることがないため下降することもない美の完成形がそこにはあった。イレーネは寒いとも言わず、そのままベッドに横たわる。

「こっちに来て。わたしのそばに。もう一度なにもかもすべて話して」と彼女は言う。

遠い昔に抱いた欲望を満たす時が来たことを彼は知る。縛られていた世界で

夢に見るほど望んでいた悦(よろこ)びをこれから味わえるのだ。彼も裸になると、中年になって出てきた腹を隠しながらベッドに入り、腕を広げて待っているイレーネのかたわらで横になる。彼は寒さを感じなくなった。かぐわしい若葉の薫りのしみついたイレーネの肌に触れると、あらゆる感覚は置き去りにされた。沈黙のなか、愛撫と口づけが繰り返され、二人は官能の淵に沈んでいく。大地は足もとから崩れ落ち、彼らを取り囲むものは消えてなくなった。

しばらくすると、彼は寒さを感じた。感覚を取り戻したのだ。悦びで満たされていた。ろうそくの炎が鏡のなかできらめいている。自分がどこにいるのか彼は思い出す。イレーネは彼を見つめている。

「どうしてあなたは忘れることができるの？」と彼女はささやく。「あの夏をおぼえていないの？　この家も、このベッドも、みんな行ってしまった大学生活最後のあの年のことも」

その言葉を聞いて、悦びの高まりが萎えるのを彼は感じる。存在と時間の感覚を取り戻していたのに。

「夏って？」と彼は尋ねる。

彼女は黙って彼の背中をなでる。それが答えの代わりだった。

「帰って」はっきりと彼女は言う。「さあ、今すぐ」

謎めいた唐突な別れの言葉にどうしてよいかわからず、彼は「あしたも会えるかい？」と尋ねる。「ぼくは夕方また来る。例の写真を撮らないと」

彼女は答えない。すでに立ち上がっている。生身の身体とは思えない彼女の裸体は、熟練の職人によって磨き上げられたオブジェのように、鈍い光を放っていた。

帰宅したとき、家じゅうが寝静まっていた。ピラールは一瞬目を覚ますと、うわ言のように、夕飯はいらないとどうして連絡しなかったの、と文句を言ったが、また寝入ってしまった。彼もたちまち眠り込んだ。翌朝目を覚ましたとき、解き明かせそうにない疑問に彼はとらわれていた。昨夜のイレーネとの出会いは夢だったのだろうか？　彼女と愛し合ったことが事実でないとは到底考えられない。時の浸食をまぬがれているような場所で、長いあいだ思いつづけ

ていたイレーネの身体をすみずみまで味わったこと、彼女から愛撫を受けたこと、さまざまな行為を繰り返し陶酔の境にまで行き着いたこと。どれもこれもが彼の脳裏から離れなかった。

ぼんやりして彼は普段はしないミスをした。同僚は奇異に感じ、見習いの司法修習生までもが彼にわかるようにさりげなく指摘した。クライアントは前日のようにとだえたわけではなかったが、昼食後、矢も楯もたまらず弁護士事務所を飛び出すと、できるだけ早く写真店に行こうと、彼はタクシーをひろった。写真店に着くと、ショートヘアーのそばかすだらけの若い娘がカウンターのなかにいた。きのうシャッターを下ろしていた娘だ。

「写真を撮ってもらいに来た。カルロス・カンポイの名で頼んでいる卒業写真だ」と彼は言った。娘の目つきに、彼が何の客かわかったという、しっかり者らしい様子がうかがえた。

「こちらへどうぞ」と言うと、カウンターのすぐ横の部屋を指し示した。

「もうみんな来たの？」と言って、彼はイレーネが来たか、それとなくさぐろうとした。

「とんでもない」と娘は答えた。「30 人いらっしゃる予定が、お客さんでまだ6 人目です。そのうちみなさんやってくるでしょう」

写真を撮り終え外に出ても、彼は店の前から離れないで、思いつめた表情で長いことあたりをうろついていた。当てもないままイレーネを待ち伏せしていたのだ。やがて店のシャッターが下ろされる。日は瞬く間に暮れ夜になった。彼はイレーネのアパートに行くと、彼女の部屋のバルコニーを見上げた。よろい戸は閉ざされ、部屋に灯りがついているかどうかさえわからない。昔のままのなめらかな肌をした彼女の美しい面影が、彼の瞼にまだ消えずにあった。ゴシック様式の彫刻のような微笑みを彼女は浮かべている。あれが夢や幻であるわけがない、と彼は思った。

数時間後タクシーをつかまえ帰宅すると、いつもどおりの日常生活が彼を待っていた。その夜彼はなかなか寝つけなかった。抱きしめたときのイレーネの肉体がなまなましいイメージとなって暗闇のなかに浮かんだ。そして彼女が言った言葉を彼は反芻（はんすう）した。それは青春時代の取るに足らないありふれたエピ

ソードを伝えているとしか思えなかったが、「あの夏をおぼえていないの？」という謎かけのようなひと言は彼を不安な気持ちにさせた。

大学生活最後の夏は悲惨な夏だった。いつまで心配をかけるのかと非難がましい視線を向ける両親に、いいかげんうんざりしていた。今どきの若いやつは働く気もなく就職も考えず、そんなに無気力で将来どうするつもりだ、と二人に始終言われた。暖かなベッドのような大学生活は終わろうとしている。きみへの情熱は持って行き場もなく、悶々とした日がつづいたんだ。そんな昔話をする彼を、謎めいた形で再会したイレーネは、からかうような表情で見つめていたが、頭を左右に振りながら、みんなが去っていったあの夏のことや、今いるこの家やこの部屋、このベッドのことはどうして忘れてしまったの、と繰り返し言う。

ベッドサイドの灯りをつけると、彼は横で眠っているピラールを眺めた。彼女は彼に背中を向け、身体を折りたたむようにして眠っている。耳の後ろ側を見せ、いつも髪で隠れている襟足は白い肌をあらわにしていた。動かないピラールの身体は普段とは違ってみえる。見慣れている横顔を見ようと、彼は彼女の身体の上から覗き込んだが、思い直して灯りを消すと、枕に頭を埋(うず)め、暗闇のなか、宙に向かって目を大きく開いた。イレーネの言っていたことは、本当にあった出来事かもしれない、と彼は思った。もしかしたらあの夏、あのアパートの大きなベッドでイレーネと愛し合ったのかもしれない。しかしそのあと、おれはどうしたのだろう？

彼の記憶に小さな裂け目が生じ、思い出の光のなかに、長距離列車を待って駅にたたずむ彼の姿が現れた。しかしすぐにそれに代わって、二つの映像が同時に、光彩をともなってくっきりと浮かびあがった。一つはなにもやる気がなく昼過ぎまで寝ていては父親からは怒鳴られ母親からは小言を聞かされてわが家で過ごした悲惨な夏の映像、もう一つは海水浴をしたりさかなの養殖場でアルバイトをしたりして海辺で過ごした愉快な夏の映像だ。

二つの夏の出来事が記憶のなかにどうして同時に現れるのだろうか？ 同じ夏に二つともが起こるはずはない。遠いあの夏に何があったのか、彼は正確に

思い出そうとした。すると、大学の昼間の光景が脳裏によみがえった。彼が卒業試験の合格証書を受け取って帰ろうとしたとき、イレーネが偶然、大学にやってくる。彼女を待っていると、彼女も合格証書を手にして戻ってくる。薄暗くひんやりとした玄関ホールで、二人はほっとした表情で顔を見合わせる。7月の太陽の強い光が少し離れた向こうの窓ガラスに当たっていた。

大学でのイレーネとの出会いがおれの人生の分岐点ではなかっただろうか？記憶をたどってみるが、あの時のことがうまく思い出せない。あれからの25年間、今日までつづく道を彼はまっすぐ歩いてきたと思っていた。あの夏を無気力に過ごし、就職したものの転職を重ね、結局南部の町にあるハイメ叔父の弁護士事務所にコネで入り、その後ピラールと出会い結婚、そして大学卒業25周年記念ディナーパーティーの招待状が届いた数日前へと、おれの人生は、もつれることもからまることもなく伸びている一本の糸のようだ。そう思っていた。

にもかかわらず、あの夏をあんなふうに無気力には過ごさなかったかもしれないという疑念を、彼はぬぐいさることができなかった。あの分岐点で、おれは別の道を選んだのではなかっただろうか？　あの時、大学の玄関ホールでイレーネと顔を見合わせた彼は、突然自分でも驚くほど積極的になり、卒業を二人で祝おうと彼女を誘い、初めて二人だけで大学の外で会う。それ以来、毎日一緒に出かけては、ロサレス地区のプールや映画館やカフェでデートするようになる。そして彼女は外国へ出発する前日、長いあいだ彼が抱いていた欲望にこたえ、彼に身をゆだねる。

彼はまたベッドサイドの灯りをつけ、上半身を起こすと、向こう側を向いて眠っている妻の顔を覗き込みながら声をかけた。

「ピラール、ピラール」

「何なの？」びくっとして目を覚ました彼女は彼に尋ねた。「どうしたの？」

「ごめん、ピラール。なんでもないんだ。ただ、なあ、おれとおまえはどうやって知り合ったんだっけ？」

彼女は彼が何を言っているのか、とっさには理解できずぼんやりしていたが、やがて泣きだすときのように顔をゆがめると、怒りをあらわにした。

「そんなことのためにわたしを起こしたの？　あなた、頭がおかしいんじゃない？」

「ごめんよ、ピラール。でもなあ」と彼はしつこく尋ねる。

「どうやってわたしとあなたは知り合ったのか、ですって？」彼女は眠りを妨げられたために鼻声でたどたどしく答えた。「大晦日のダンスパーティーであなたの従兄のルシオが紹介してくれたんでしょう」

彼女はくるりと背中を向けると、もう起こさないでよと言いながら、身体を丸めて頭の上まで毛布をかぶった。彼は急いで灯りを消した。

暗闇のなか、彼はピラールと出会ったときのことを正確に思い出そうとする。大晦日のダンスパーティー、町のクラブハウスで、生バンドの演奏するけたたましい曲に合わせて、おしゃれをした若い男女が踊っていた。あの夜も道はいくつにも分岐していたのだ、と彼は思った。分岐した道のひとつにピラールがいたのだ。彼女は胸の形やふっくらとした身体を魅力的に見せるピンクのドレスを着ていた。彼は、別の道に何があったのか考えようとはしなかった。しかし、そこにピラールがいないことはわかっていた。もし別の道をたどっていたら、今ごろ俺はここにはいなかっただろう。選べる道はいくらでもあったのだ。彼はしばらく目がさえて眠れなかった。

翌朝ピラールは不機嫌そうに彼を見て、こう言った。

「まず、連絡もせずに、あんなに遅く帰宅したこと。それから、あんなどうでもいいことを訊くために、わざわざわたしを起こしたこと。もういいかげんにしてよ」

彼は彼女に適当な言いわけをしてごまかすと、弁護士事務所に出かけた。イレーネの家へ行く前にちょっと顔を出す程度のつもりでいたのだが、事務所を抜け出すことはできなかった。持ち込まれた案件が多く、打ち合わせをする必要があったのだ。そのため会食しなければならず、そのあともずっとデスクに向かわなければならなかった。事務所を出ることができたのは、午後８時半を過ぎたころだった。イレーネのアパートにやってくると、管理人室のチャイムを押した。出てきたのは、髪もとかしていない不愛想な老婆だった。

「申しわけありません」と言いながら 1000 ペセタ札を一枚、彼は老婆に握

らせた。驚いた彼女は受け取ったものの、札を手に、どうしていいかわからない様子だった。

「３階端のイレーネさんに取り次いでほしいのですが」

「３階端はずっと前から空き家です。どなたも住んでいらっしゃいません」と金をもらって急に愛想よくなった老婆は答えた。

「入居者がいるはずです。イレーネ・エレーロさんです。わたしは彼女の古くからの友人です」

「いらっしゃいませんよ。わたしが知らないはずありませんもの」

「確認させてもらっていいですか？　急ぎの用事があるので」

「どうぞ、どうぞ」老婆は札をエプロンのポケットにしまうと、鍵束を出しながら言った。「お上がりください。どうぞお確かめください」

管理人の老婆の言ったことは正しかった。殺風景な家のなか、たしかに人の気配はしなかった。彼はライターをつけ、よろい戸の隙間から入る街灯の光をつたいながら見てまわった。置かれている家具は部屋の主には慣れ親しんでいたようだったが、他人である彼には、たとえ使い込んでもけっして打ち解けそうにない素っ気ない様子をみせていた。一番奥の寝室、大きなベッドの前にある洋服ダンスの鏡の表面は乳のように白くくすんでいた。そこには、見覚えのある三本枝の燭台の影がぼんやり映っていた。

頭が混乱したまま、老婆に礼を言って外に出ると、イレーネの部屋のバルコニーを見上げながら、しばらく歩道にたたずんでいた。思いをめぐらしていたが、落ち着きを取り戻すと、彼は歩きだした。ミナス通りの方へゆっくりと進み、サンタ・ルシア通りやエスピリトゥ・サント通りを長いことあてもなくさまよい、コレデーラ通りをとおって、とうとうフエンカラル通りに来てしまった。まるで友人たちと意味もなく議論をたたかわせては、遠い道のりをただ歩いて過ごした学生時代のように。クアトロ・カミーノスまでやって来たとき、若い頃見慣れていた街並みにあの時代に味わった苦悩と混沌を見出し、彼は家路についた。

イレーネと結ばれた不思議な夜の出来事は彼の情念の燃えさしに火をつけた。青春時代彼は満たされない欲望に悶々としていたが、今は会えない相手を

渇望していた。ひとから声をかけられても上の空で、辻褄が合わないことをした。家庭では誰も彼の異変に気づかなかったが、職場では翌日昼飯を一緒に食べていた同僚が、さては女でもできたかと言って、彼をからかった。そう言われても、ぼんやりとした彼の態度は変わらなかった。

ついに大学卒業25周年記念ディナーパーティーの当日になった。金曜日だったので、ピラールは一緒にどこかへ出かけようと彼を誘った。その時になって初めて彼はパーティーがあるのだと打ち明けた。

「何も聞いていないわ」と、彼女は不快感をあらわにして言った。

「パートナー同伴じゃない。大学の同窓生の夕食会だ」

「じゃあ、なぜ今まで黙っていたの？」

「言ったよ。たしかに言った。だいたいいつだっておまえはおれの言うことを聞かない。ほら、卒業写真をもう一度撮らなければならないってことも、覚えていないだろう？」と、彼は当てこすりながら、うまく言い逃れた。

まるで結婚式にのぞむ新郎のように慎重にスーツを選ぶと、彼は身支度をととのえ出かけた。一番乗りするのは避けたいと思っていたのに、到着したのは、会場であるホテルのサロンが開く30分も前のことだった。地下のバーに行くと、彼のようにせっかちな何人かの旧友に出くわした。しわや腹の脂肪、白髪や染めた髪の色が目立つ中年男や中年女になった彼らに、若い頃の面影を見つけるのはひと苦労だった。

サロンが開いたとき、ほぼ全員揃っていたが、イレーネはまだ来ていなかった。親しい者同士が集まって話がはずんでいた。発起人のカルロス・カンポイはそれぞれの輪をまわっては、彼らと抱き合ったり、大げさな身振りで喜びを表したりしていた。カルロス・カンポイは青年の頃と少しも変わってはいなかった。とはいうものの、でっぷりと太って、気品を添える上等なスーツに身をつつみ（それは人格の一部と化しているかのようだ）、頭の周辺部にわずかに残る髪の毛を赤い色で染めていた。

やがて、カルロス・カンポイは手をたたきながら静粛を呼びかけると、少し甲高い声で、もうみんな集まったのでパーティー会場に移動してくれ、と言っ

た。だけどその前に今回の卒業写真を持っていってくれよ、みんなよく撮れていると思うよ、と言い足した。

仲間同士の輪が崩れると、中年の女や男は三々五々、卒業写真の入った封筒が山と積まれたトレイを持ったボーイを取り囲んだ。彼はカルロス・カンポイに近づくと、こう尋ねた。

「イレーネ・エレーロは今日来るの？」

カルロス・カンポイは、それまで進行役として実務的な態度をとっていたが、この質問に顔色を変えた。

「失敬。それはどういう意味だね？」

この男は質問の意味はわかっている。同じことをもう一度訊いてほしいだけだ。いつもこんな台詞を糸口にして会話を楽しんでいる。いつまでこんなやり取りを繰り返すつもりだろう、と彼は思った。

「イレーネ・エレーロだよ」と今度ははっきりと発音した。「イレーネが来るかどうか訊いたんだ」

カルロス・カンポイは困惑した様子で黙っていたが、やっと口を開くと、こう言った。

「いや、だけど、君は知らなかったのかい。イレーネだったら、大学卒業後まもなく亡くなったよ。ヨットを操縦中、海で溺れ死んだ。気の毒なことをした。同窓生のなかで最初に死んだのが彼女だった。だから彼女はこの卒業写真には載っていない。物故者を集めた追悼アルバムを作成しようと考えたんだけれど。それって、どう思うかな？」

彼はなにも言わずにボーイに近づき、封筒のひとつを掴み、封を開くと、卒業写真を取り出した。そしてまるで、カルロス・カンポイの言った言葉が理解できなかったかのように、写っている多くの顔のなかからイレーネの顔を探してみたが、見つかるはずはなかった。

「みんなで彼女の葬式を出したんだ」いつのまにか横に立っていたカルロス・カンポイが言った。「数年間は毎年年末、レクイエムのミサに行ったよ」

同窓生たちは写真を眺めては冗談を言い合い、空になったグラスをボーイに返すと、サロンを出て、ゆっくりとパーティー会場に入っていった。パーティー

会場には、赤いバラで飾りつけられた長テーブルがあった。彼は、同窓生たちがパーティー会場に入り、気の合った仲間同士思い思いの席に座るのを眺めた。その時彼は、彼をイレーネの家へ導いた分岐点をたどってみようと心に決め、外に出た。タクシーに乗ったとき、時代がかった民俗衣装に身をつつんだ学生楽団の一団がホテルにやって来るのが目にとまった。けたたましい楽器の演奏がはじまろうとしていた。

薄闇のなか、イレーネのアパートはいつもどおり穏やかな静けさに包まれていた。彼は何度も管理人室のチャイムを鳴らすが、応答はない。とうとう我慢できず、力まかせにファサードの門を押すと、錠がはずれて門が開いた。彼は３階に駆けあがり、思っていたとおりドアの上のすき間に鍵を見つけドアを開けると、廊下の壁を手さぐりでつたいながら奥の寝室へと向かった。澱んだ空気が闇のなかでじっと動かずにいる。

イレーネ、と彼は呼びかけた。イレーネ。

寝室に入ると、三本枝の燭台を見つけ、ろうそくに火をつけた。炎が鏡に映った。寝室には家具しかない。ただベッドの上に置かれたものに彼は気がつく。それは彼が手にしている卒業写真の入った封筒とサイズも紙質もまったく同じ封筒だった。その封筒をのぞくと、なかにカルロス・カンポイがくれた卒業写真が見えた。

イレーネは溺れ死んだ、と彼はつぶやいた。彼の記憶は迷走しながら大学生活最後の夏にたどり着く。薄暗くひんやりとした大学の玄関ホールで彼はイレーネを見かけた。

あの出会いが二人の関係のはじまりだったのかもしれない。数日後、長いあいだ抑えこんでいた欲望を彼は解き放つ。四隅に装飾がほどこされた長いねじり柱が立っている大きなベッド。そこで彼は彼女と何度も交わる。そして７月末彼女はフランスへ旅立つ。８月半ば彼も彼女の滞在する町に行き、職業斡旋所に登録し仕事を見つけると、近隣の農場や養殖場で労働に励む。

日曜日、二人は待ち合わせ、熱い砂の上で抱き合い口づけをかわすと、イレーネが巧みに操るヨットに乗り込む。帆がはためくなか、ヨットの上で二人はつ

ながる。そして次の日曜日、ヨットが岸から離れ沖まで行ったとき、突然海が荒れだした。ヨットは操縦不能となり、船体は傾くと海に倒れ、そのまま転覆する。操縦するイレーネの指示にしたがって彼はヨットの体制を立て直そうとするが、マストは根元から折れていた。

その地点で、彼の記憶は別の淀みへ流れ下っていった。二人は船体にしがみつく。最初そばにいたが、そのあと次第に二人の位置はズレ、距離が開いていく。そこへ大波が繰り返し押し寄せる。このままでは身の安全は保てないと、死の恐怖と不安に彼は駆られた。

さまざまなことを彼は想像する。恐怖がぼんやりとした影でしかなかったときから、疲労と寒さが混乱した妄想を生み、奇妙な映像が次々と脳裏に浮かんだ長い時間のあいだのことだ。たぶんその時彼は、ピラールのような女性を思い描くことができた。彼女は小麦色のふっくらとした身体を魅力的に見せるピンクのドレスを着ている。そして双子の息子や娘や犬や映画のセットのようなテレビの置かれたリビングルームを想像することも彼にはできた。

ふたたびベッドの上にある封筒を手にとると、燭台のそばに行った。短くなった三本のろうそくの炎は消えたかと思うと、瞬きはじめる。封筒から卒業写真を取り出すと、一列目に頬にうっすらと笑みをたたえたイレーネがいた。そのあと彼は自分の顔をさがした。見つからないことはわかっていたのだが。やはりそこに彼はいなかったが、たいしてショックを受けなかった。埃だらけの空き部屋でただ孤独を感じただけだ。詣(もう)でる者のいない霊廟(れいびょう)か、朽ち果てた山奥の小さな教会にいるような気分だ。

彼はベッドに座った。イレーネと揃って大学卒業25周年記念ディナーパーティーに出席することはかなわなかった。彼はあの夜この部屋に自分を導いた分岐点を探り当てようと、曲がりくねった記憶の迷路をたどる。落ち着いてゆっくりと。こうしているとやがて、イレーネとおれの二人の顔が載った卒業写真を抱えて、きっとイレーネは現れるだろう。

感激して思わずもらした彼の小さな叫び声は騒がしいテレビの音でピラールには聞こえなかったはずなのに、しかしピラールは彼の動きは察知したにちがいない。テレビの画面から目を離すと、書斎に行こうと振り向いた彼を尋問す

るような目つきでじろりとにらみ、テレビの音量を下げながら、こう彼に問いかけたのだ。

「どうかしたの？」

「いや、なにも」誰にも邪魔されず記憶の迷路をたどることはもう不可能だ、と彼は観念した。「大学卒業 25 周年記念ディナーパーティーの知らせが届いたんだ。ついこのあいだ卒業写真を撮った気がするのに。こんなに長い時間が流れたなんて信じられないよ」

そして彼は、心の動揺をごまかそうと、突然笑いだした。

解説

ホセ・マリア・メリーノの短編作品では、現実世界とは別の《超現実世界》が描かれることが多い。《超現実世界》とは日常的な現実世界と幻想的なものが混合した世界であり、現実世界に平行するように存在する、もう一つの現実世界のことである。メリーノが《超現実世界》を好んで描く理由のひとつに、彼がエドガー・アラン・ポーやホルヘ・ルイス・ボルヘス、フリオ・コルタサルなどの幻想世界を構築する作家の作品を愛読していたことがあげられる。これらの作家の影響を受けているのだ。これまで訳者が訳したメリーノの作品は、夢や虚構が現実世界に侵入したり、登場人物が異界に紛れ込んだりして、幻想的なものが現実世界に強い揺さぶりをかけ現実世界を混乱に陥れるような作品だった。

本作『分岐点』では、《超現実世界》と思われるイレーネとの出来事が、すべて「彼」の妄想だったということが最後にわかる構造になっている。妄想が終わるのは最終場面での妻の呼びかけで「彼」が我に返ったときである（本作冒頭での大学卒業 25 周年記念ディナーパーティーの招待状における、人生の道半ばで亡くなった者がいたという文章が、「彼」にイレーネの死を妄想させるという仕掛けになっている）。最終場面まで読者は妄想には気づかず、その時になって初めて、妄想が始まっていたのは「彼」が招待状のなかに 2 度目の卒業写真撮影の呼びかけを読んだ直後あたりではなかったかと推測する。

しかし、本作が「彼」の妄想だと種明かしされても、読者は容易には納得できないのではないだろうか。25 年前の夏のイレーネとの出来事は現実にあった出来事のようにもみえるからだ。一方、現実世界のはずの「彼」の家庭生活は「迷走する思考」から引き出された「表象」かもしれないと「彼」は考える。現実世界と幻想的なものの区別が明瞭でないため、読後、不可思議な感覚から抜け出せなくなるのである。そういう点では、本作もやはり《超現実世界》が描かれた作品といえるのである。

では、この《超現実世界》では何が描かれているのだろうか？ 現実世界には、分岐点で選ばれなかった別の道、つまり生きなかった過去が寄り添うよう

に存在しており、それを抱えながら人間は現実世界を生きている、というのが本作『分岐点』のテーマのひとつといえるのではないだろうか。なぜなら、現実世界の象徴と思われる、「彼」自身の写真が載った卒業写真と、過去に生きていた者の世界の象徴と思われる、イレーネの写真が載った卒業写真という、2 種類の卒業 25 周年記念写真を「彼」は手にするからである。さらに本作では、記憶も大きなテーマとして扱われている。人間にとって現実とは、空間と時間が規定する世界だけではなく、あやふやな過去の記憶も現実を構成する重要な一部ではないかということを本作は提示しているのではないだろうか。25 年前のイレーネとの出来事は現実に起こったことかもしれないし、そうではないかもしれない。それが判然としないまま、「彼」は現実世界を生きていくからである。

本作は、「彼」が妄想していたことをごまかそうと笑いだす場面で唐突に終わる。ごまかし笑いする「彼」に、「過去というものは、野生の獣の表情を隠し持っていて、いつひとに襲いかかるかわからないのだ」、だから、きみの人生は、妄想していたことをごまかそうとしたあと本格的に始まるのだ、と語り手がつぶやいているようにも思える。主人公の行く末に少し謎を残したまま、読者にそれを考えさせるのは、メリーノがポーなどとは対極的ともいえるかもしれない、いわゆる写実主義的作家であるアントン・チェーホフやレイモンド・カーヴァーなどの影響も受けているからだと思われる。

現実世界と幻想的なものの混合した世界である《超現実世界》を描くメリーノの卓越した手法は、メリーノが写実主義的作家と幻想主義的作家の両方に傾倒していたことも一つの要因だと考えられる。メリーノがどのような作家から薫陶を得ているのかについては別の機会に詳しく述べたい。

ホセ・マリア・メリーノは、1941 年スペイン北西部の自治州ガリシアの港町ア・コルーニャに生まれ、幼い頃、隣接する州カスティーリャ・イ・レオンの古都レオンに移り住んだ。(そのため、彼の作品の舞台はレオンか、現在の住まいのある首都マドリードであることが多い。本作はマドリードが主な舞台となっている)

マドリードで法学を学んだのち、彼は 1972 年詩人としてデビューした。

Novela de Andrés Choz（1976）以来、小説家としてこれまで多数の作品を発表している。*La orilla oscura*（1985）、*El centro del aire*（1991）、*Las visiones de Lucrecia*（1996）、*Los invisibles*（2000）、*El heredero*（2003）、*La sima*（2009）、*Musa Décima*（2016）などである。ミゲル・デリーベス文学賞（1996）やラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ文学賞（2004）など受賞した文学賞は数多い。2008 年、スペイン王立アカデミーの会員に選出された。さらに 2013 年、*El río del Edén*（2012）で国民文学賞を受賞した。

ここに訳出したのは、José María Merino, *El anillo judío y otros cuentos*, Castilla Ediciones, Valladolid, 2005 所収の短編 13 編中の 1 編 “Bifurcaciones” である。